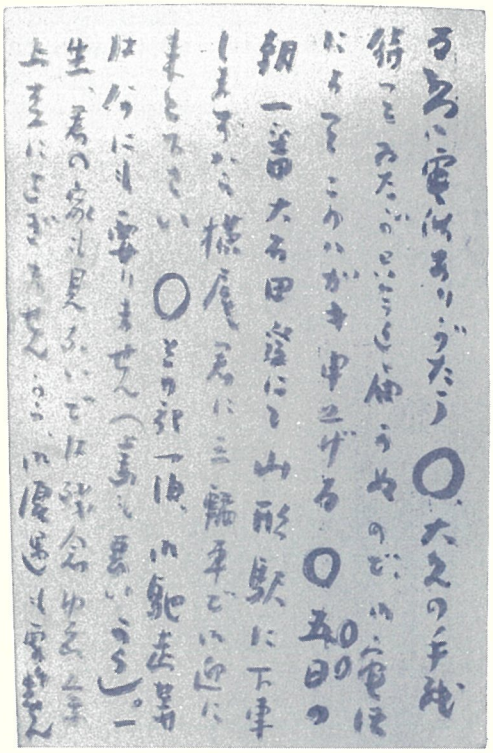
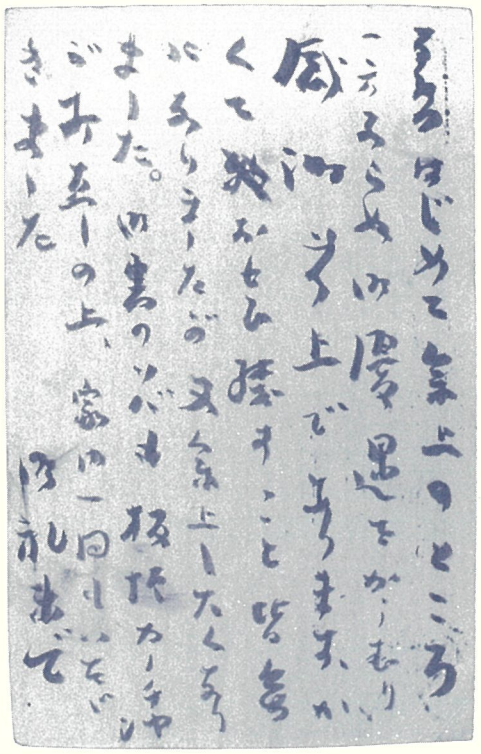
館報「茂吉記念館だより」第 27 号
■発行／令和 6(2024) 年12月15日 ■発行人／波克彦 ■編集・発行／
公益財団法人斎藤茂吉記念館〒 999-3101 山形県上山市北町字弁天 1421
URL https://www.mokichi.or.jp tel.023-672-7227 fax.023-672-2626

Vol.27 2024.12.15
茂吉記念館だより





斎藤茂吉 結城哀草果宛葉書 上：昭和 22 年 5 月 4 日付
下：同年 5 月 7 日付 ※詳細：本誌 11 頁参照

目次

・50 回記念トークセッション「私のなかの斎藤茂吉」 2-9
・館長着任にあたって 10
・新資料紹介「茂吉の書簡（全集未収載）」 11
・短信（掲示板・案内）・編集後記ほか 12

五十回記念トークセッション「私のなかの斎藤茂吉」

令和六年五月十九日、三友エンジニア体育文化センター（山形県上山市）を会場に開催した第五十回斎藤茂吉記念全国大会において五十回記念トークセッション「私のなかの斎藤茂吉」を行った際の記録です。登壇者は小池光、小島ゆかり（司会）、三枝昂之、永田和宏の四氏（五十音順）。

＊＊＊＊＊

小島ゆかり（以下小島）皆様こんにちは。このトークセッションなんですが、このメンバーは現代歌人の中でも茂吉マニアのビッグスリーの三人の方なんです。ですから今日ここでお三方が一緒に茂吉についてお話をされるというだけで私はわくわくしています。斎藤茂吉記念館が今回のテーマを決めてくださって、あとは何の打ち合わせもしてないので、さぞかしてんでんバラバラに、そのマニアぶりをご披露されることかと思うんですが、今日はそれを楽しんでいただきたいですね。お一人ずつ五首についてでもいいですし、どうしてこういう歌を選んだのか、お話しくださればと思います。では、小池光さんからお願いします。

小池光（以下小池）皆さんこんにちは、小池光といいます。茂吉が七十歳で亡くなって、その歳をはるかに超えてしまいました。斎藤茂吉の歌集は十七冊あるんですが、どれを読んでも面白いというか刺激を受けるという感じでずっと付き合ってきました。どの歌集でもいいんだけれども、『連山』という歌集があります。多分皆さん知らないと思うんだけど、十七冊の歌集で一番有名なのは『赤光』で、その次に有名なのは『白き山』なんだけど、『連山』なんていう誰も言及しない歌集があるんですがちょっと特殊な歌集です。これは昭和五年だから今から大体百年くらい前。茂吉が五十歳ぐらいのときに満州旅行をするんですよ。満州国ができるのが昭和七年だからその前です。誰のものともつかぬようなカオスに満ちた満州を満鉄の招きで旅行して、満州に行くだけじゃなくて当時の北京の方まで足を伸ばして帰りは朝鮮回って帰ってきて、つまり東アジア全域を歩くような大旅行をします。五十日間ぐらいですけども、そのときに作ったのが『連山』という歌集です。つまり茂吉の中では例外的な歌集で、何年間の歌を集めて一冊の本にするのではなく、二ヶ月足らずの間に作った歌だけを『連山』一冊にまとめる、非常に珍しい作り方をした歌集です。

◆小池光の斎藤茂吉五首

道観に飼はるる猫はキャラメルを今食はむとしてよろづを忘る　『連山』「千山途上」

年ふれる壕のなかよりわが兵の煙管出でしと聞くが悲しさ　同「旅順」

夜ふけてより露西亜をとめの舞踊をば暗黒背景のうちに目守りき　同「哈爾濱　其一」

長春の停車場に来て日本語の電話のこゑを聞ける親しさ　同「南下　哈爾濱より長春」

旅人は時に感傷の心あり犬ひとつゐて畑を歩く　同「北平漫吟　北平途上」

私は『連山』が大好きで何とも言えない気持ちになります。ちょうど百年ぐらい前の満州を茂吉と一緒に旅行しているような気持ちになって、点々といい歌がたくさんあって非常に愛読している一冊です。〈道観に飼はるる猫〉っていう歌があって、これは『連山』の中でも有名な方なんだけど、道観というのは道教のお寺です。中国大陸は仏教でもキリスト教でもなく道教という我々のよく知らない宗教です。それを信仰してる民衆が、その道教のお寺の道観を見学に行く。そしたら猫を飼ってるんだね。道観のお坊さんが猫を飼ってて、その猫が出てきたんです。それに、キャラメル食うかなと思ってポイっと投げてやったら食ったと言うんだよ。猫が夢中になって食った。そういう歌なんだけれども、〈今食はむとしてよろづを忘る〉というのが素晴らしくて、よろづという言葉は初めて見ましたよ。昔はあったよね、よろづ屋とか。何でも売ってるコンビニみたいな店。これは猫が世の中のこと全て忘れて、キャラメルに夢中になるという姿を伝えてて、このよろづという言葉がものすごくいいと思いますね。だいたい猫にキャラメル投げるのも面白いしね。猫の姿が目に浮かぶわけなんだけど、猫は口だけで食うんですよ全て。手で押さえて食はないでしょ。前足で食べ物を押さえて食わない。猫は全ての場合、口だけで食う。だからこれは多分キャラメル食えない。滑っていって。キャラメルを食おうとしてキャラメルが滑って。だから猫がもう食いたくて食いたくて、わからないのに夢中になって食おうとして、ど

んどんどんキャラメルが滑っていくという情景が目のあたりに浮かんで、いかにも〈よろづを忘る〉だろう。よろづはちょっと他の日本語に言い換えがきかない言葉だけれども、要するに世の中の苦しいことつらいこと、そういうの一切忘れてキャラメルに夢中になるという姿がものすごくよく出てると思って感心しました。猫がキャラメル食うというのも言われてみると不思議といえば不思議だよね。皆さん猫にキャラメルやったことありますか。食うらしいですよ。多分ミルクの匂いがするからじゃないかと思います。私も猫はずいぶん飼いましたけど、ついにキャラメルをやったことはなかった。これを読むと「あー、斎藤茂吉だ」と思います。

小島 まるで見てきたように猫とキャラメルの場面をお話しくださってありがとうございます。三枝さんお願いします。

三枝昂之（以下三枝） 今のキャラメルの話面白いですね。猫は全力投球をして食べようと四苦八苦してる。だけどそれを食い入るように観察している茂吉も全力投球の実相観入ですよ。茂吉は全力投球がどこかでユーモアにも広がる不思議なキャラクターなんですけれども、私は『小園』を選びました。

◆三枝昂之の斎藤茂吉五首

のがれ来し吾を思へばうしろぐらし心は痛し子等しおもほゆ　『小園』「疎開漫吟（一）」

ゆふがれひ食ひをはりたる一時を灰となりゆく燠を目守りつ　同

あらぎのくれなゐの実の結ぶとき浄けき秋のこころにぞ入る　同「岡の上」

こゑひくき帰還兵士のものがたり焚火を継がむまへにをはりぬ　同

松かぜのつたふる音を聞きしかどその源はいづこなるべき　同

茂吉の歌集というと小池氏が今触れましたように、だいたい『赤光』か『白き山』。最近は『つきかげ』もかなり人気なんですが、私は『小園』が一番好きです。疎開をした上山と金瓶時代の歌でどれを選ぶかというとご当地ソング金瓶時代を選びます。一首目を読んでみましょう。〈のがれ来し吾を思へばうしろぐらし心は痛し子等しおもほゆ〉という歌です。茂吉は昭和二十年の二月末から三月のはじめに上山に来て、疎開をすることを決意します。昭和十九年の十二月頃から東京は頻繁に空襲に見舞われて、佐佐木信綱は十九年の十二月に熱海に疎開しております。疎開が始まるわけですけれども、茂吉も疎開をするということに決めて、二十年の四月八日に上野駅の駅長に直談判して、特別切符を手配する。四月十日に乗車して夜の七時二十分に発車をすると、感謝感謝と日記に書いてますね。翌日十一日に上山について金瓶で疎開をはじめるんですけど、面白いのは家族は東京にいるんですよ。自分だけがまず疎開をする。これはちょっと不思議だよね。例えば僕が好きな歌人に前川佐美雄っていう人がいますけど、彼は奈良に住んでたんですけれども、B29が奈良の上空を通って、大阪に爆弾を落とすということで、奈良もやられるんではないかって思って、鳥取の塚本邦雄の盟友の杉原一司という佐美雄の歌のお弟子さんのところへ疎開することを決めるんです。妻子を杉原家に届けて、自分は帰ってくる。何回も行って帰ってくるということはするんだけども、まず自分が行くっていうのはちょっとかなり珍しいですね。それで、先に行って準備をしているという心づもりなんだろうけれども、〈のがれ来し吾を思へばうしろぐらし〉茂吉の手帳五十五の四月十七日にこの歌が書かれています。日記をめくると四月十五日東京夜大空襲って書いてある。つまり東京が十五日に大空襲に遭った。それを踏まえた歌が、〈のがれ来し〉の歌ということだと思いますね。東京の空襲の記録を見ますと、四月十三日から十四日に、今の豊島区文京区新宿等が空襲にあって、翌日の十五日が、太田区、目黒区、港区、世田谷区などが空襲にあって、あの茂吉の家は世田谷ですからそこで大丈夫だろうか、もしかしたら焼け出されて困ってるのではないかって〈のがれ来し〉の歌になる。これは本当にこれもう切実な歌なんですけれども、茂吉の行動を見ると、どこかでちょっと最初に自分がいち早く疎開する。いち早く逃げるという気持ちがあるか

壇上の三枝昂之氏と小池光氏

ら、〈のがれ来し吾を思へば〉ということになるわけです。同じ日の歌が二首目です。〈ゆふがれひ食ひをはりたる一時を灰となりゆく襖を目守りつ〉炭火を見つめて火が灰になるまでをずっと見つめている、ということですけれどこの歌からはもうなすべきことのないままの沈思黙考という心が歌から伝わってくる。歌としては二首目の歌はこの自分の行為だけを言っているわけですけれども、その行為の中から茂吉の深い焦燥というものがにじみ出る。こんな行為を物に託すところに、茂吉の独特の歌の力があるということをこの歌も示しているのではないかと思います。

小島 ありがとうございました。お二人のお話を伺っただけでも、それぞれの場面がとても個性的に見えてくると思います。そして次は永田さんのすごくかゆそうな歌です。

◆永田和宏の斎藤茂吉五首

家蜻に苦しめられしこと思へば家蜻とわれは戦ひをしぬ
『暁紅』「晩秋より歳晩」

鼠等を毒殺せむとけふ一夜心楽しみわれは寝にけり
同「楽」

辛うじて二つ捕へし家ダニを死刑囚の如く吾は見て居り
同「遠雲」

麦飯の石をひろふは夜ぶすまゆ蚤捉ふるに豈おとらめや
『小園』「疎開漫吟（三）」

蚤のゐぬ夜の臥処は戦争のなき世界のごとくにて好し
『つきかげ』「鍵」

永田和宏（以下永田）永田です。よろしくお願いします。虫の好かない奴っているでしょ。でも虫の好く奴が茂吉なんですよね。茂吉は本当に虫に好かれる人で、茂吉が虫にというか、蚤やダニに苦しめられてる歌がいっぱいあります。私の中の斎藤茂吉はやっぱり変な人というか、面白い人。その面白さとか変さ、変な感じがどこからきてくるかというと、茂吉はすごく一生懸命であるところがとても面白いというか、決して笑わせようとか面白がらせようと思ってんじゃないけど茂吉はいろんなことに一生懸命である、それがとてもたくまざるユーモアになっている。

さっきの小池の猫もそうなんだけど、それが一番端的に表れてるのが蚤とダニと鼠の歌だと私は思っています。実は小池に五年くらい前に頼まれて仙台文学館で「斎藤茂吉のおもしろさ」という講演をしたことがあって、そのときに蚤とダニと鼠の歌を集めました。茂吉には蚤だけでも三十首ぐらいあるんですけど、今回は五首だけ集めてきました。〈家蜻に苦しめられしこと思へば家蜻とわれは戦ひをしぬ〉、次の歌は〈鼠等を毒殺せむ〉と、三首目は〈辛うじて二つ捕へし〉この辺の言葉遣いというのがとんでもない。茂吉は実は戦争に一回も行ってないんだけど。五首目は〈蚤のゐぬ夜の臥処は戦争のなき世界のごとくにて好し〉こういうすごく大仰な表現なんだけど、わざと言ってるんじゃなくて、茂吉は毎晩蚤と戦争してたんですよ。

板垣家子夫の茂吉の随行記を見ても、茂吉自身で書いてるのを見ても、茂吉はものすごく蚤に食われやすい。蚤に食われて寝られないので一計を案じて布団のカバーを自分で縫って、袋にして、袋の中に入って、首のところで留める。これで一晩寝るんです。それでようやく寝られたと思ったけど、袋の中にも蚤が十匹ぐらい入っていて首の周りだけ蚤に食われた。また茂吉は蚤を捕まえるのが下手なんですよ。この頃、蚤見なくなったからみんな忘れてると思うけど。こうして舌でペロッとなめて、蚤をくっつけてつかまえるんですね。もたもたしてる間に蚤がピュッと向こうに逃げちゃうんで、茂吉は蚤を捕まえられない。大石田で茂吉の世話をしてくれた看護師さんは、蚤を捕まえるのがすごくうまくて、どんどん蚤捕まえて、しかも茂吉の恨みを晴らすっていうんで、縫い針でぷちんと留めて、「先生これ蚤の磔だす」って言って見せてくれる。それにすごく茂吉は感激する。

たかが蚤に噛まれた、蚤に刺されるということだけなんだけど、その蚤と必死に格闘している姿が歌の中に見えてくるっていうのは、とても多くてどれもこれも茂吉と蚤との闘争の記録みたいな感じがあります。茂吉の面白さっていうのは、こんなことになんでこんなに一生懸命になるんだ、みたいなそういう一生懸命のなり方がとても尋常じゃなくて、そこが一首のアンバラン

壇上の小島ゆかり氏と永田和宏氏

スの面白さというか、そこがとても私にとって面白いところです。

この面白さは多分一首だけ読んでも出てこない。これは茂吉の全歌業『赤光』から『白き山』に至って『つきかげ』に至る全部の歌を読んでいる中で、この茂吉のストーリーを知っている中でそこはかとない面白さになっています。この味を出せる歌人が今ほとんどいません。そういう意味でも、茂吉は傑出していると私は思っています。

茂吉の有名な歌でここにはのってないけど、〈鼠の巣片付けながらいうこゑは「ああそれなのにそれなのにねえ」〉。これは当時流行ってた「それなのにそれなのに」という歌が鼠の巣を片付けながら、ふっと出てくるという歌です。けれどやはり一番面白いのはたかが蚤とかダニとか鼠とか、そんな小さい動物をあたかも自分が世界を相手に戦争しているような感覚で捉えている歌だと思います。こういう面白さは茂吉独特だろうとも私は思いますね。

小島　私はお三人ほど奥深く茂吉のこと知っているわけではないので私なりにすごく気になる二首目と三首目を話してみたいと思います。

◆小島ゆかりの斎藤茂吉五首

蟋蟀の音にいづる夜の静けさにしろがねの銭をかぞへてゐたり

『赤光』「秋の夜ごろ」

十方に真ぴるまなれ七面の鳥はじけむばかり膨れけるかも

『あらたま』「七面鳥」

はるかなる国とおもふに狭間には木精おこしてゐる童子あり

『遍歴』「ミュンヘン漫吟　其一」

酢章魚などよく噛みて食ひ終へしころ降りみだれくる海のうへの雨

『霜』「海濤」

税務署へ届けに行かむ道すがら馬に逢ひたりあゝ馬のかほ

『つきかげ』「猫柳の花」

〈十方に真ぴるまなれ七面の鳥〉も、永田さんがおっしゃったような変な感じがします。これは日本画家の平福百穂さんが代表作となる七面鳥の絵を描いていて、お宅で七面鳥を飼っていました。茂吉はそれを見ながら、なんと七面鳥の歌を十七首も群作として作っています。この歌が気になるのは、他の歌は全部「しちめんちょう」と読めるように作ってるんですがこの一首だけはなぜか「しちめんのとり」という読み方なんです。この歌も「十方に真ぴるまなれ七面鳥はじけむばかり膨れけるかも」とすれば、音数が合うんですけども、魅力は確かに半減するなということは、読んだだけでもわかるのですが、なぜこの歌だけ〈七面の鳥〉になったのかなということがずっと気になって何度読んでもよくわからないですけど、この〈十方〉は『梁塵秘抄』からきているじゃないかと言う方が多くいます。明治の終わりぐらいに『梁塵秘抄』が発見されて、文学者たちみんなが興味を持って、北原白秋も影響を受けて『白金之独楽』っていう詩集を出してますからそれくらい『梁塵秘抄』は興味を持たれますが、その中に十方浄土なんていう言葉がある。もしかしたらその影響かもしれない。四方八方よりもくまなく全方位というような宇宙観のように感じられる〈十方〉なんですが、そこで〈七面の鳥〉がまた気になる。どうも七面鳥の七面っていうのは、恋の季節とか興奮をしたときに首の辺りの色が変わるので、七面鳥って言われるそうなのですけどもこの歌を読むとそれよりは十方に向いて立体的に七面鳥が膨れて七面ぐらい向きがあって、どこから見ても弾けんばかり〈膨れけるかも〉というふうに見えてくる。何かとてつもなく怖いような存在のエネルギーみたいなものが、感じられます。こういうふうにじーっと茂吉がこれを見ていて、そしてすぐ次の歌には一羽がひたぶるに膨れながらまともにこっちを見てるみたいな歌もあるんです。それもまた、怖いような変な感じがして、怖い反面、じっと自分もその七面鳥を見てるような七面鳥に見られてるような、見てると七面鳥がどんどん膨らんでいくようなっていう感じがして仕方がない。そんな何度読んでも気になる歌としてこの歌が自分の中にあります。

それから次のヨーロッパで作ったミュンヘンの歌ですが、〈はるかなる国とおもふに狭間には木精おこしてゐる童子あり〉これは大変美しいといえば美しい歌で、歌そのものも大好きなんですが、茂吉の有名な滞欧随筆も大好きです。茂吉はヨーロッパにいたときにたくさん随筆を書いて、あるいは帰国してから回顧して書いた素晴らしい随筆集があり、その中の「イーサル川」という随筆に歌の背景らしきものが書かれています。歌の中ではこの場面がミュンヘンがその川の岸にある街として出てきます。一般的にはイザール川と呼ばれているようですが、随筆の中ではイーサル川と書かれていますね。この川は南のアルプス山中から出て北へ向かって流れているそうで、〈藍のドーナウ〉に対して〈緑のイーサル〉。楽しいのはこの場面で、ある日谷の方にこの川の方へ茂吉が降りていったらイーサル川のほとりに童子がいて、しきりにこだまを起こしている。童子がハルローというと、それが五つも六つものこだまになって、はるかの方に消える。童子がイイヤー、ホホー！と言うとまたそれがこだまになるという部分があるんです。私はこの部

分がとても好きでどんな澄んだよく通る声で、どんな発音でハルロー、イヤーホと言ったのかなといつも思って、たまにですけどお風呂の中で一人でハルローとかイヤーホーとか言ったりすると余計いい気持ちになるんです。そして、注目したいのは次のように茂吉が述べていることです。

私は西暦一九二三年の夏にこの土地に来、翌年の夏までゐたので、屡(しばしば)この川に親しみ、心に憤怒があり、心に違和があるときには、いつも私はひとりこの川べりに来て時を消すことをしてゐた。

斎藤茂吉「イーサル川」

私は最初、心に憤怒とか違和があるときって、この頃の留学をしていた茂吉のことを考えれば、精神医学のことや歌のこと、それから自分の将来のこととか、そういうことを考えて悩みがあったのかなと思ったんですけども、この随筆をくまなく読んでいるとこの少し前にね、なんと「南京虫日記」という随筆があるんですね。それで永田さんのお話じゃないですけど、茂吉はヨーロッパで特にミュンヘンで非常に南京虫に苦しめられていて「マインツの一夜」という南京虫だらけの長い一夜の随筆もあるんです。「南京虫日記」も、いろいろ宿を変わったり下宿を変わってもその都度南京虫に襲われて、もう憤懣やるかたないっていう状態が、茂吉は真面目で読んでる方は本当に笑ってしまうようなことが事細かに書いてあるので、もしかしたらこの〈心に憤怒があり〉というのも、南京虫に襲われたそういう憤怒かもしれない。随筆をずっと丁寧に読んでいくとそんなことにも思い当たると、いよいよこの歌の背景とか、随筆の背景の深さとか面白さ、茂吉って言う人がそこに存在して、ミュンヘンにいて、昼があったり夜があったり、南京虫がいたり、ハルローって言う童子の木霊を聞いたりという、その時空というものに引っ張り込まれるような感じでこの辺りは夢中でいつも読んでいるところです。では、小池さんに二首ほどお話しいただけたらと思います。

小池　〈年ふれる壕のなかよりわが兵の煙管出でしと聞くが悲しさ〉これを解説しますと満州を舞台にして明治三十八年に日露戦争がありました。茂吉が訪れた昭和五年は戦争から二十五年ほどしか経ってないんだよね。だから戦場がそのまま残ってる。茂吉は兄貴二人とも日露戦争に従軍してるんです。二人とも生還するけどね。だから今度のその満州旅行で兄たちが戦ったところを訪ねるみたいなモチーフがあって、ただ満州漫吟するだけじゃなくて、しきりに戦場の跡に行って歌作ってた。その中の一首で、これは旅順攻防戦だったと思うけど要するに二〇三高地の乃木大将が司令官で日本兵が五万人以上死傷したところで、そこに行ったら塹壕が残ってて、そこからキセルが一本出てきた。タバコを吸うキセル。これはっとしたね。我々はもちろん戦争経験全くないんだけれども、塹壕の中に兵隊がずっと配置されていて、すぐ戦争が始まるかというとそうじゃなくて、戦闘と戦闘の間があるんでしょうね。だからじーっと号令がかかるの待っている。そのときやっぱりタバコを吸うんだよ。このタバコと戦争が面白いっていうのは、ちょっと不謹慎だけど考えてもいいテーマで当時はタバコ吸って待ってたらしい。号令がかかるのを待っている間に。煙草も明治三十八年だから刻み煙草しかなくて、キセルで吸っていた。そのキセルでタバコを吸って突撃って号令がかかってキセルを捨てて突撃していって死んだ。死んだかどうかわかんないけどバタバタと死んだわけです。多くの日本兵が死んだわけだからそこでキセルが出てきたということがとても悲しかったという歌だ。いろんな戦争の話を聞き、本を読んだりするけれども、塹壕からキセルが出てきたって書いてある本はどこにもない。この茂吉の一首だけが記録にとどめていると思うんです。そういう点で短歌の記録性という点からもすごく大切なことで、明治時代の戦争はキセルでタバコ吸いながら行われたということは、ちょっと驚くことではないですか。タバコを吸って戦争してるというとなんか不謹慎なように思うけど、そうじゃない。タバコを吸って戦争してみんな死んだ。そう考えるとやっぱり、はっとしますよ。だから、さっき永田君が言ったような歌ももちろん茂吉にはいっぱいあるけれども、こういう歌もあって、これはいささかも笑う歌じゃないよね。こういう驚く歌もある。、つまりその間口が非常に広くて、その幅広さが近代歌人の中では茂吉は際立っている。次は私の大好きな歌で、ハルピンの歌なんだけどね。〈夜ふけてより露西亜をとめの舞踊をば暗黒背景のうちに目守りき〉当時の満州はロシア革命から逃げてきたロシア人がいっぱい入ってるんです。ロシア人街を作っていてそこに元々いた支那人たちの集落もある。それに新しく入っていった日本人の集落がある、集落というか日本人地区ね。だから国際都市でさ、ロシア人もいるし支那人もいるし日本人もいるというふうな、そういうカオスに満ちた空間で、そこに行ったら、夜に舞踏会があるから見に行こうやって言うんで見に行ったと。そしたら「露西亜をとめ」。これが綺麗なんだよね。私もちょっと旅行したことあるけど、子供は本当かわいくて美しくてねバラ色のほっぺしてさ。それが数十年経つともう見違えるようになるわけだけども。

この子供のときのロシア人って本当にかわいいですね。お人形さんみたいな真っ赤なほっぺたに黒いきちっとしたオーバーを着て。私が行ったときは冬だったんだけど黒い毛皮のオーバーを着て帽子かぶって、顔がピカピカして輝いている。その乙女たちが出てきて踊りを踊ったという歌なんだけど、暗黒背景がすごいと思う。これは茂吉の造語です。茂吉の造語ってのはいろいろなやり方があるんだけども、暗黒と背景という普通の日本語をくっつける。暗黒背景と言ったとき全く違う言葉が出てくるという感じがしませんか。そういう造語というか半造語の作り方のセンスが茂吉は際立ってシャープだから、ただ黒い幕の前で女の子が踊ってるというだけなんだけども、暗黒背景の前で踊ると言われると、昭和五年という時代の持っている暗黒性を感じませんか。まもなく日本は満州国をでっち上げるわけです。その直前の非常に息詰まるような雰囲気があったと思うんだけども、それを見事に語り出してるのが暗黒背景であって、この少女のバラ色のほっぺたが際立ってくるというか、その対比において非常にエロスを感じるよね。このエロスとミリタリズムが交錯してて出てくるのが茂吉の特徴で、だからはっとするのはそこにあるんです。戦争の悲惨さだけを歌うんじゃなくてやはりどこかで女の影がちらついてくる。女の影というのもちょっとセクハラだけどなんかそんな感じの典型を見せていて、いかにも茂吉の歌だなと思った。

小島 この歌は小池さんの鑑賞を聞いていたら、自分が思ってたより何倍もいい歌に思われてきてバラ色のほっぺたが浮かんでくる。確か『連山』には〈わが体に触れむばかりの支那少女巧笑倩兮といへど解せず〉（※註：「巧笑倩兮」は『論語』にあり「口元が可愛らしい」の意）という歌も出てきますよね。それも今おっしゃったような愛らしさと美しさとちょっとしたエロスがあるようにおもいます。次は三枝さんにお願いします。

三枝 今の小池氏の二首を聞きながら思い出したことを二つ。まず、戦争中のタバコということ。一昨日ちょっと必要があって、金子兜太のインタビュー集を読んでいた。彼は東大卒業して、トラック島へ行きます。トラック島で米軍が攻めてくるのを守るための陣地を作るんだけど、米軍はもうトラック島なんかすっ飛ばして、サイパンの方へ行っちゃう。するとやることがないからトラック島の軍隊はどうするかというと、金子兜太は東大出てるから行った人間の中では結構若いのに偉くて、みんな暇を持て余してるから句会をやるんですよ。陸軍海軍の分け隔てなく、句会でいい句をとって点が高い句への賞品が何かっていうとタバコなんです。タバコの種類もものすごく豊富です。人気なのはアサヒだったかな。つまり戦争中と言っても、このキセルの歌から戦闘のトラック島なんてのはもう置いてかれた島だから句会をやってタバコを吸って、トカゲを捕まえて食べるというような生活をしていたんだけどやっぱりそこでのタバコが大切なキーワードになります。それに「露西亜をとめ」も。これはソビエトに駐在をしていた人から聞いたのだけど、十代の少女はみんな魅力的でテニス選手のシャラポワのようだって言ってましたね。

次に、茂吉の歌の中で良い作品がたくさんあるんですけど、一番好きなのは昭和二十年の「短歌研究」十月号の巻頭に載った、「岡の上」という六首ですけど「岡の上」自体は五首かな、それが好きです。私が挙げた歌の四首目を見てみましょう。〈こゑひくき帰還兵士〉という歌です。これは帰ってきた兵士をかこんで金瓶のどこかで焚き火をしながらどんなだったっていうことで村人がねぎらいながら集まる。帰還兵士は話すことたくさんあるんだけれども、焚き火を継ぐ前に終わるっていうところで、報告が短く終わってしまう。なぜ短く終わってしまうかっていうと、語ることはもう山ほどある。だけど、一つ一つを語っていくとあまりにも自分の体験の悲惨さが蘇ってくるから言葉が続かない。継ぐ前に終わるというところで、語ることは尽きないけれども悲しみの深さが言葉を少なくする。そのことを茂吉達もよくわかるから、経験のない事態の中で、語る者も聴く者も沈黙に沈んでいくという歌です。斎藤茂吉の日記を見ると、九月十五日に郵便局に速達で郵便局に投函をして九月下旬に「短歌研究」に届くわけです。このときの「短歌研究」の発行人は木村捨録っていう歌人です。歌人兼実業家なんですけれども、彼の『戦後歌壇の出発』というエッセイの中で、「岡の上」を受け取ったときに、これで短歌は大丈夫だと確信した、というふうに書いてます。つまり戦争が終わって、八月十五日の後はみんな茫然自失なんですけれども、その茫然自失の中から一歩踏み出すにはどうしたらいいかっていうふうにみんな考えているわけで、その一歩を踏み出す一つの足がかりを茂吉のこの「岡の上」が示している。そんなことを編集者が言っていて、それがやはり今読んでもその通りだと思いますね。日本人が一番苦しいときに、どういうふうに次の一歩を踏み出すかということを茂吉は「岡の上」で示した。そして『白き山』はもう圧倒的な迫力です。だけど、あれはその前の一番苦しい一歩っていうものがあるから『白き山』がそれに続いたということで、やはり僕はそういうことを考えると茂吉が昭和二十年の九月にこういう歌を

提示したということが、歌人や文学者の大きな支えになったのではないかと思います。ですから、小池氏の話を踏まえて言いますと、茂吉はどんなときでも全力投球なんです。家ダニと戦争をするのもそうだし、小島さんの一首目〈夜の静けさにしろがねの銭をかぞへてゐたり〉も全力投球で数えている茂吉の姿が見えてくる。面白い路線ではない全力投球が、結果的にユーモアに繋がるっていう面がある。だけどストレートに時代の困難を正面から受け止めた全力投球もあると茂吉が改めて教えているのではないかと思います。

小池　一言だけ。〈こゑひくき帰還兵士のものがたり〉は昭和を代表する一首だと思うけど、帰還兵士という言葉は暗黒背景と同じだと思う。一種の茂吉語で、普通は帰還兵士と言わなかったと思うよ。何て言ったかはちょっとわかんないけどやっぱり半造語でさ。そして帰還兵士がすごく重いんです。暗黒背景と同じ半造語というか茂吉語みたいなのが、さりげない顔して歌に入ってるんだけど実はそういう日本語で初めて言ったのが斎藤茂吉なんだよ。

小島　三枝さんのこの「岡の上」の選歌で私は驚いたんですけども、何となくうっすらと「岡の上」で引っかかるなと思って改めて見直してみたら、ここには〈沈黙の吾に見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ〉という代表歌があるんですよね。それじゃなくてこっちの歌を選んでいるところにすごく感心しました。

三枝　〈沈黙の吾〉は立派すぎて、むしろ帰還兵士の歌の方に満身創痍の日本人が一歩踏み出す心情が生きているのではないかと思います。

永田　茂吉の面白さはやっぱり茂吉の全ストーリーを知っている上で出てくるということを言ったんだけど、今の全力投球というのもその通りだし、さっき小島さんが言った「心に憤怒」っていう言葉。これは茂吉を語る上では大事なことです。茂吉は非常に強い憤怒というのを常に常に抱えてた人で、ある種のストレスでもあるんだけども、これは中野重治も言ってるんですけど、茂吉は非常に鬱屈、怒りというものを抱え込んでいて、必死に耐えてたんだけどそれが時折、耐えきれなくなって爆発する。その爆発の歌が面白いんだと思います。

『斎藤茂吉、その迷宮に遊ぶ』（岡井隆・小池光・永田和宏　一九九八年　砂子屋書房）という本を今日は持ってきたんですけど、岡井隆さんとそこにいる小池光氏と、三人で茂吉を語りつくそうじゃないかって言って京都で二年間にわたってディスカッションをしてまとめたものです。毎回三人で三時間以上は喋りました。今読んでみるとなかなか名著です。その中で有名な歌ですけど〈この野郎小生利なことをいふとおもひたりしかば面罵をしたり〉。これは留学のときの歌ですけど、茂吉はあの年で留学行ってるから、言葉は不自由なんです。自分より若い学生たちが入ってきて、何か言っているが自分は理解できない。ある程度まで耐えてるんだけど、時折爆発して馬鹿野郎とか言ったんでしょうね。多分必死に耐えているけれど、時折爆発するというところが茂吉にはあって、それが面白い歌なんだけど、どこか哀れさを感じさせる。

ユーモアってそんなものでしょう。ユーモアというのは面白いだけじゃユーモアにならなくて、笑った後で何らかのある種の寂しさでもないけど、しみじみとしたものをちょっと感じるのがユーモアだと思います。茂吉の面白さはやはり、茂吉の全人格をこちらが知っていてここで茂吉は爆発したのかとか、ここで鼠に対してこんなに怒ってるのかというような、そういう面白さがやはり茂吉の中に歌集を読んでいて、こちらが理解して、その文脈の中で読む面白さだとという気がしています。さっきちょっと看護婦の話をしたけど、〈わがために夜の蚤さへ捕へたる看護婦去りて寂しくてならぬ〉という歌。この看護婦は自分のために蚤を捕まえてくれた看護婦で、この自分が対峙していて敵だと思っている蚤をわざわざ捕らえてくれたその看護婦が自分のもとを去っていった、また一人自分を助けてくれるというか自分の周りにいて自分を守ってくれる人間がいなくなる。茂吉はそういう、なんていうかな、やはりある種寂しさを抱えてた人で、その寂しさに耐え難くなって過剰に反応するところに、茂吉の面白さが出てくるように私は思います。

例えばこんな歌もあって〈真夜なかにわれを襲ひし家ダニは心足らひて居るにやあらむ〉。真夜中に自分を襲ってきた家ダニが、今自分の血を吸って満足しているだろう、と。家ダニに心があるかどうかわからんけど、今きっと自分の血を吸って、自分がこんな苦しいのに家ダニの方はこころ満足しているにあらん。こういう発想とかとんでもないところに行ってしまうというのが、茂吉の面白さです。それに私の挙げた四首目〈麦飯の石〉の歌もとんでもないことですよね。この頃の麦飯は石がいっぱい入ってるわけです。我々もよくとったけど、ガリっと噛んでしまった。麦の中から石をひろっている最中に、これはと思ったのが夜、夜寝ていたときに、蚤を探して捕らえること。この〈豈おとらめや〉が何とも大がかりで大げさです。でも、これは茂吉が単に面白がって言ってるだけじゃなくて、「茂吉だったらやっぱりそう言う

だろうな」という気がとてもする。つまりここでちょっと言いたいのはやはり茂吉は面白いし笑ってしまうのだけれど、それは茂吉がずっと、憤怒というか自分の中の怒りを抱えて歩んできたからだと思います。茂吉の人生はむしろ成功者ですし、幸せなことは間違いないんだけども、そういう中で時々爆発するように出てくる自分に対峙するある種の敵みたいなものをダニとか蚤とかそういうところに仮託していってたのかなと、そんな気もしています。茂吉の体質は蚤に弱いんですよ、岡井さんも言ってるけど免疫なんかできない人で、いくらたっても蚤にやられてる人なんだけど、そういう体質もあり、自分の中に抱えているある種のマグマみたいなものを時々制しきれなくなってぱっと出てくる。そういう面白さ。あるときは蚤であり、ダニであり鼠であり。そういうところに怒りが出てくるのかなという気がします。

小島　刻々と終わりが近づいているので、これだけはどうしても言っておきたいということがあったら、おっしゃってください小池さん。

小池　斎藤茂吉を読むようになったのは四十代以降なんです。若いときは全然興味なかったんだけど。四十から五十代からずっと読み出してきて、『連山』なんか代表的なんだけど、短歌というのはこういうものであればいいんじゃないかと思ったね、茂吉の歌を読んでいると。他の人はいなくてもいいというか。だから短歌はこういうものであっていいんじゃないかという、一口で言えばそういう気持ちが私の中に芽生えてきて、だから現代短歌への関心がそれで失われてしまったような、なんかそんな感じがするな。茂吉の歌はいろんな出口が、窓口が、入口が、たくさんあって、それが非常に多彩多様で豊かです。せっかくだからもう一首だけ言うと、〈長春の停車場に来て日本語の電話のこゑを聞ける親しさ〉。長春っていうのは満州の大きな街で、そこの停車場に来たら公衆電話がある。電話の声っていうのもさっき言ったように記録性という点で大事です。昭和五年、大体百年前既に駅には公衆電話があったとわかる。この歌で日本語の声聞くだけだったら、啄木になっちゃう。日本語の声を聞けばね。そんなに親しくないんだけど、日本語で電話をかけてるというのがいいわけです。電話の声が日本語というのがいい。だからさっき言ったように、そこにはロシア人、支那人、日本人がいるわけでしょ。そういう言語が飛び交って電話をかけてるわけだ。その中で日本語で電話をかけてる人がいたと。それがすごくほっとしたっていうか嬉しかったっていうかですね。そういう歌なので日本語の電話の声を聞ける人でしたって言ったときに、この電話っていうのが短歌としてはものすごく大事です。こういう歌が点々とあって、いいと思う。

三枝　一言ね。歌人の歌集、歌人の軌跡を見るときに、最初の歌集か、最後の歌集か、とよく言われます。茂吉の場合は『赤光』か『白き山』か。だけれど、実は今日のトークを聞いていると、そういうふうな単純な、どっちかということじゃなくて、それぞれの歌集に茂吉でなければ歌えないような世界があるということが確認できたと思います。だから茂吉を考えるときに通説に従うのではなくて、もう一度白紙に帰って茂吉と向き合うっていうことが大切ではないかと、今回のトークは教えてくれたような気がします。

永田　もう一言だけ。歌枕というのがあって歌われることで歌枕になる。歌枕が持てるってのはすごく大事なんだけど、〈おもひいづることあり夏のみじか夜に金瓶の蚤大石田の蚤〉。金瓶と大石田は蚤で有名な歌枕になった。

小島　私は自分が一番好きな酢ダコの歌をちょっと大きな声で読んで終わりたいと思います。〈酢章魚などよく噛みて食ひ終へしころ降りみだれくる海のう〈の雨〉なぜかわからないけどこの歌がとても好きでたまらなくて。一生歌を作り続けて、こういう歌が一首でもできたら本望だなと思うぐらい好きな歌であります。それぞれいろいろなことを話しましたが、何となくうまく説明できないけれども何かが伝わったということは進行役として実感できました。皆様どうもありがとうございました。

■小池光（こいけ　ひかる）・「短歌人」
■小島ゆかり（こじま　ゆかり）・「コスモス」
■三枝昂之（さいぐさ　たかゆき）・「りとむ」
■永田和宏（ながた　かずひろ）・「塔」
※登壇した四氏は何れも斎藤茂吉短歌文学賞選考委員（委員長：三枝氏）
※斎藤茂吉の作品には、今日では差別的で不適切とされる語句や表現がありますが、時代背景を考慮したうえで原作を尊重しながらトークセッションを行いました。

就任のごあいさつ

このたび斎藤茂吉記念館の館長に就任いたしました波克彦でございます。浅学非才ではございますが精一杯記念館の発展に務めて参りますので、秋葉四郎前館長に賜りましたご支援と同様、引き続きご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

小生は、歩道短歌会において、斎藤茂吉先生に師事された佐藤佐太郎先生に長く師事して参りました。その意味で茂吉先生の孫弟子にあたるということができるかと思います。

館長就任にあたって茂吉記念館を訪れ、改めて平成二十二年八月に、前館長率いる歩道短歌会で、茂吉のふるさと上山「講演・記念館見学・吟行の会」（略して「上山の会」）を催して、北は青森県、南は九州の福岡県、宮崎県、大分県、熊本県、四国・中国は徳島県、山口県、広島県からと全国二十一の都府県より百名近くの参加者を得て、記念館や宝泉寺を訪問し、また、平成二十二年度記念館第一回公開講座に参加したことが懐かしく思い出されます。

佐藤佐太郎先生は、茂吉先生の歌について、〈先生の歌は、「万葉調」と「写生」とを根本として成りたち、語気、言葉のひびきを最も重んじた歌人であった〉と、自著『茂吉秀歌』（岩波書店）上巻に書いておられます。また、同著において佐太郎先生は、茂吉先生の一首「ひんがしはあけぼのならむほそほそと口笛ふきて行く童子（どうし）あり」の解釈にあたって、〈短歌は一首は一首の世界をもって独立しているものであるから、読者は田園のあけぼのとして受け取ってもかまわない〉と述べておられます。佐太郎先生は、更に、次の一首「なげかへばものみな暗（くら）しひんがしに出づる星さへあかからなくに」について、〈大正二年作。「おひろ」と題された恋愛相聞の歌四十四首中の第一首である。この一連について、作者は「この女性は実在的のものか、或は詩的なものか、或はどう、或はかうといふモデル問題は穿鑿（せんさく）してもはや駄目である。（中略）」（「作歌四十年」）といっている。そういうのは作品だけを受け取ってもらいたいという要求である。一首に表現された言葉だけから、そこに流れているものを受け入れるのが正しい享受であり、その他のことは第二義的なことである〉と述べておられます。

かような茂吉先生や佐太郎先生のお考えに従い、小生は、短歌の鑑賞法として、ゼロからの鑑賞法、あるいは言い換えれば純粋鑑賞法を旨として、短歌を鑑賞することにしております。歌から読み解く茂吉先生の心、ゼロからの鑑賞の勧め、これから歌に親しもうとする人、短歌に必ずしも長く親しんできてはいない一般の人には、短歌を堅苦しく考えないで、是非ゼロからの鑑賞で良いのだと伝えたいと思っています。

小生の八十年の生涯の生活スタイルは、科学の分野においても、スポーツにおいても、音楽においても、生活においても、理論より実践、自分で考えて仮説を検証することにありました。小生は文学研究者ではありません。かつて自然科学の分野に身を置いた一研究者の時も、自分で立てた仮説の検証という実践をベースに、また体を動かす野球やゴルフなどのスポーツにおいても理論より実践、ピアノやフルートの演奏においても実践あるのみで生きて参りました。短歌においても、目で見、耳で聴き、体（五感、八感）で捉えて作歌する実践を中心とし、ゼロからの鑑賞という直接鑑賞、直接作歌あるのみを旨として参りました。ですからこれからも、歌の一首一首の鑑賞においても、背景情報を知ることなく（少なくとも過度に追及することなく）、どんな歌・作品でもゼロからの鑑賞法・純粋鑑賞法を一義的鑑賞法として重視して参りたいと考えております。

■波 克彦（なみ かつひこ）令和六年十月一日館長就任

波 克彦（なみ かつひこ）

本名：波々伯部 自克（ほほかべ よりかつ）
出生地：兵庫県（1944 年生）

［経歴］
1962 年 兵庫県立篠山鳳鳴高校卒業
1966 年 東京工業大学卒業
1971 年 同大学院博士課程修了
1971 年 昭和電工（株）入社
研究所、本社、米国メリーランド大学客員研究員、上級技監（常務執行役員）・知的財産部長、顧問
2007 年 ～現在 米国 Oblon, McClelland, Maier & Neustadt, L.L.P.（兼 オブロン外国法事務弁護士事務所）シニア・アドバイザー、工学博士、CLP（Certified Licensing Professional）

［外部団体活動歴］
（財）日本特許情報機構評議員、（財）工業所有権協力センター理事、（社）日本経済団体連合会知的財産委員会委員、日本知的財産協会常務理事・監事、山形大学工学部運営諮問会議委員、（独）理化学研究所社会知創成事業アドバイザリー・カウンシル委員長、日本ライセンス協会副会長及び理事（～現在）、Licensing Executives Society International(LESI) 化学・エネルギー・環境委員会共同委員長、LESI 会員委員会共同委員長等

［歌歴］
1978 年 歩道短歌会入会、佐藤佐太郎に師事、「歩道」同人、現代短歌協会会員
1985 年「歩道」編集委員・選者、「短歌現代」第 9 回歌人賞佳作（96 年）、「歩道賞」受賞（00、08 年）
2021 年 ～「歩道」編集人
2022 年 ～ 常総市長塚節文学賞（短歌部門）審査員

［歌集］
『赤き峡谷』、『新世紀』

茂吉の書簡
－全集未収載 結城哀草果宛葉書－

結城哀草果（あいそうか）は、明治二十六年山形県生まれで、本名光三郎、旧姓は黒沼である。生後ほどなく本沢村（山形市）百目鬼（どめき）結城家の養子となり、農業に従事し生涯山形を離れることはなかった。農耕の傍ら独学に励み、大正三年に「アララギ」に入会し茂吉に師事する。後年「アララギ」の選者となり、斎藤茂吉記念館の初代館長も務めた。

茂吉記念館では哀草果の旧蔵資料を遺族より寄託を受け、保管している。寄託資料の中には茂吉に関する貴重な資料も多くあり、その中から昭和二十二年五月五日・六日の茂吉の哀草果宅（樹蔭山房）初訪問について記された『斎藤茂吉全集』未収載の葉書二点を、次により紹介する。

昭和二十二年四月二十八日、茂吉は哀草果宛に「五月二日、三日に御宅に参上一泊御願いたしたいがご都合いかがにや」と樹蔭山房に訪問するための日程を伺う葉書を送った。四月三十日の茂吉の日記に「結城哀草果氏ヨリ電話」とあるのは、おそらくこの葉書を受けて哀草果が日程の変更を申し出る電話をしたのだろう。五月三日の日記に「結城哀草果ニ電話ヲカケタ。サウシテ5日ニ一番発ニテ山形ニ行クカラ三輪車ニテ迎ニ来ルヤウニ話ヲシタ」（原文ママ）とあり、さらに五月四日の哀草果宛葉書には「五日の朝一番大石田発にて山形駅に下車しますから横尾君に三輪車で御迎えに来て下さい」と同様の内容が記され、郵便が遅いことを考慮し電話でも訪問の打ち合わせをしていたことがわかる。

迎えた五月五日は天気の良い日だった。茂吉は午前四時三十分に起床、昨夜から疼痛のあった扁桃腺になお疼きがあったものの熱は無かったため、門人の板垣家子夫（かねお）を連れ立ち始発の汽車で山形に向かう。一方の哀草果は「朝目が覚めると、私の心はわくわくするのを覚えた。わが家にはじめて茂吉をお迎えする日が、現実として到来したからである」と喜びに満ちた待望の日の朝を迎えた（『茂吉とその秀歌』）。

当時は終戦直後の混乱期であり、哀草果の自宅がある本沢村にはバスも通らず、タクシーを頼むことも出来ない状態であった。そのため、三輪車（三輪自動車）が移動手段として用意され、荷台の中に藁を厚く入れてその上に莫蓙を敷き、茂吉のために座布団が一つ置かれた。荷台に乗った茂吉は至極機嫌がよく「大名の様だ」と何度も口にして、舗装されていない凸凹道を通る際に身体が跳ねることもあったが、そのたびに子供のように声を上げて笑ったと同行した板垣は『斎藤茂吉随行記』に記している。この時運転をしていたのは哀草果の門人である横尾健三郎であり、一生に一度の大役とハンドルを握っていたが、道中ややスピードに乗って橋を渡ったところ急にカーブしたため、三輪車の動揺が激しく倒れるのではないかと思った場面があったという。

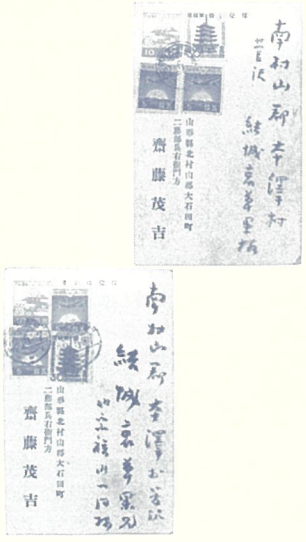
五月四日の葉書には「御馳走等は何もいりません」「御厚遇も要りません」とあったものの、哀草果と家族らは茂吉をもてなすべく苦心する。しかし、交通手段同様に終戦直後のことでなかなか思うようにはいかず、食事は樹蔭山房のある本沢村百目鬼に近い同村長谷堂の蕎麦粉を用いて打った生蕎麦が用意された。食前には集まった人たちが民謡などを盛んに唄い、その唄がひと段落すると皆で蕎麦を食べ、食後は茂吉と歓談した。茂吉はこれらのもてなしに対し、大石田町に戻った後の五月七日の葉書にて「一方ならぬ御厚遇をかうむり感謝無上であります、かくて〼（註茂吉の誤字）おもひ残すこと皆無になりましたが、又参上したくなりました」と感謝の言葉を送り、土産にもらった蕎麦は板垣の妻から打ち直してもらい美味しく食べたという。この訪問は、茂吉と哀草果の双方にとって、実に貴重でこの上ない時間であった。

念願の初訪問から半年後の昭和二十二年十一月、茂吉は家族の待つ東京へと帰る。以降、山形の地を踏むことはなく、昭和二十八年二月二十五日に茂吉はその生涯を閉じた。

同日、哀草果は山形から東京へと赴いていた。翌日の二十六日に茂吉と九カ月ぶりの面会を行う予定だったからである。哀草果の胸には大きな希望と喜びとが躍動していたが、その日宿とするところで新聞記者より茂吉の追悼歌を求められ驚き、ラジオのニュースで茂吉の訃報を聞いて愕然としたという。

今回紹介した葉書を含む樹蔭山房訪問の詳細は、現在開催中の特別展「茂吉とめぐり逢う人たち　影響を受け、与えた人」において展示している。

■業務係学芸員　佐藤結子



斎藤茂吉結城哀草果宛葉書　上：昭和22年5月4日付　下：同年5月7日付
※裏面（文面）：本誌1頁参照

短信（掲示板）

◆特別展（会場：当館内守谷夫妻記念室）

◇「旅する斎藤茂吉　その瞳は何を映したか」

斎藤茂吉が旅をした際の短歌や随筆、絵画などを展示（会期：令和六年四月二十七日～同年八月三十一日）。関連イベント：布宮雅昭氏（山形県歌人クラブ会長）をゲストに担当学芸員との茂吉講座「茂吉の足跡をたどる」（六月十六日、館内集会室、参加四十名）。

◇「茂吉とめぐり逢う人たち　影響を受け、与えた人」

斎藤茂吉と文人・歌人たちとの交流を示す資料を展示（会期：令和六年九月十四日～翌年三月三十一日）。関連イベント：布宮雅昭氏（山形県歌人クラブ会長）をゲストに担当学芸員との茂吉講座「茂吉を偉大にした先人たち」（十月六日、館内集会室、参加三十名）。

◆広報・教育普及活動等

◇みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2024

東北芸術工科大学が主催した「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2024in 蔵王 いのちをうたう」（令和六年九月一日～同月十六日）に当館はアドバイスと資料貸出等の協力を行いました。

◇「斎藤茂吉記念全国の集い」に名称変更

令和六年七月十八日の斎藤茂吉記念全国大会の主催者意見交換会、同年八月二十六日の主催者と同大会運営委員会における協議により、例年五月開催の同行事名称を「斎藤茂吉記念全国の集い」に改称しました。なお、これまでの実施回数は継続し、来年五月十八日には「第五十一回斎藤茂吉記念全国の集い」として開催します。

◇ドナウエッシンゲン音楽の日々

上山市の国際姉妹都市・ドナウエッシンゲン市（ドイツ）で行われた現代音楽イベント「ドナウエッシンゲン音楽の日々」（通称：ドナウエッシンゲン音楽祭）に、作曲家兼インスタレーションアーティストのロビン・ミナード氏（Prof.Robin Minard）が、「かみのやまサウンドマーク」（Kaminoyama Soundmark）を出品し、当館はその制作に際して取材等の協力を行いました。作品は上山市内で録音された様々な音と斎藤茂吉の朗読を組み合わせた音楽作品。ドナウエッシンゲン駅前のカールスガルテン公園に常設されているモニュメントから、斎藤茂吉が同地を離れた列車出発時刻の午後四時二十分に合わせて音が流れます。

かみのやまサウンドマーク

◆斎藤茂吉記念館役員等の変更

◇館長の辞任と就任

秋葉四郎氏は令和六年九月三十日付で当館館長を辞職しました。後任の館長には同年十月一日付で波克彦氏が就任しました。（詳細：本誌十頁参照）

◇評議員の選任

公益財団法人斎藤茂吉記念館評議員会が令和六年六月二十五日に当館集会室において開催され、大瀧保氏、松本佳子氏の退任に伴い、布宮雅昭氏、佐藤法子氏が選任されました。また、同年十月二十九日の評議員会において、横戸隆氏の辞任に伴い、加藤洋一氏が選任されました。任期は三氏ともに令和十年六月までとなります。

ふるさと納税

上山市ふるさと納税制度のご活用による控除が受けられます。また、斎藤茂吉記念館提供によるオリジナルグッズの返礼品があります。

上山市ふるさと納税　検索

「友の会」ご入会・「活動支援募金」のご案内

●友の会

友の会会費は、当財団が実施する公益目的事業全般の充実等に活用します。

◎賛助・維持会員（対象：個人・法人・団体）
　年会費 1 口 10,000 円（会員証で 10 名まで無料入館）
◎一般会員（対象：個人）
○蔵 王 会 員　年会費 1 口 5,000 円（会員証で 5 名まで無料入館）
○最上川会員　年会費 1 口 3,000 円（会員証で 3 名まで無料入館）
○学 生 会 員　年会費 1 口 1,000 円（会員証で本人のみ無料入館）
　※友の会は入会日より 1 年間有効です。

●活動支援募金

活動支援募金に対する寄付金は資料の修復、複製資料の製作や記念館の設備更新等費用の一部として活用します。

○法人・団体等　1 口 10,000 円
○個人　1 口 5,000 円

※「友の会・活動支援募金」とも、何口でも結構です。
※ご入会・ご寄付ご希望の方は当館までお問い合わせください。

◆編集後記

本紙二十七号は、第五十回斎藤茂吉記念全国大会の記念トークセッション「私のなかの斎藤茂吉」の報告を掲載しました。

なお、本年も茂吉研究の向上につながるきわめて重要な資料と作品の寄贈・寄託がありました。

これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので、大変有難く存じます。その新資料は次年度以降に公開の予定です。

（編集担当＝五十嵐）

◆利用案内
◇開館時間　9：00 ～ 17：00（入館受付 16：45 まで）
◇休館日　毎週水曜日（祝日・休日の場合は翌日）
　7 月第 2 週の 7 日間・12 月 28 日～翌年 1 月 3 日
◇入館料　一般：大人 600 円・学生 300 円・小人 100 円
　団体：大人 500 円・学生 250 円・小人 50 円
　※学生：高・大学生　小人：小・中学生
　※団体 10 名様以上 ※障がい者割引（団体料金適用）
◇音声ガイド 300 円（英語版有）

◆交通案内
◇お車でお越しの方（※無料駐車場有：普通車 70 台／大型車 5 台）
　・東北中央自動車かみのやま温泉 I.C. から市内方面 20 分
◇電車でお越しの方
　・JR 奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー 10 分
　・JR 奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩 3 分

館報「茂吉記念館だより」第 27 号■発行／令和 6(2024) 年 12 月 15 日■発行人／波克彦 ■編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館 〒 999-3101
山形県上山市北町字弁天 1421 tel.023-672-7227 fax.023-672-2626 URL https://www.mokichi.or.jp ■印刷／株式会社上山印刷